

2023年5月31日(水)

老球の細道733号

## 5月の言葉

今まで生きて来て何よりの幸せは日本で戦争がなかったことである。沖縄、広島、長崎を訪れることによって戦争の悲惨さを知った。命を落とすのは庶民、戦争指導者は生き残る。G7広島サミットがウクライナ停戦、核戦争の防止につながることを願わざるをえない。

今月は信じられないような事件が後を絶たなかった。コロナとの戦いが終焉を告げようとしているのに、再び別な意味での社会不安との戦いになるのだろうか。

孫の運動会リレー、高体連の大会でもサプライズの戦いが続いた。『葉隠』の「勝つというは、敵に勝つことなり。敵に勝つというは、味方に勝つことなり。味方に勝つというは、自分に勝つことなり。自分に勝つというは、気をもって己の身体に勝つことなり」。

### 1・テレビから

◆「大海でアリの叫んでいるような時があるけれど、むなしくなる時があるが、世界に訴え続けなければならない」〈NHK ニュース「G7 広島サミット、被爆者の受け止め」〉：被爆者八幡照子(83)さんの言葉。コロナ下で英語を勉強して英語で外人に訴えたという。戦時下のゼレンスキーは「平和はきょう、より近づく」とつぶやいた。

### 2・読書から

◆「秀吉は時々口に出して自分をほめた。他人もよくほめるが、自分もほめるのが秀吉のくせだった」〈山岡荘八著『徳川家康6』講談社〉：女子マラソンの有森裕子さんもバルセロナ五輪で銀、アトランタで銅メダルを獲得した時「初めて自分で自分をほめてやりたい」と言った。結果を出さなくとも、平時から自分をヒーローになりすますのも大切かも。

◆「天才とは風のひと吹きによって消え去るようなローソクの火ではなく、嵐によってもいよいよ燃えさかる火炎のようなものである」〈小川圭治著『人類の知的遺産』講談社〉：「天才」という言葉を「夢を追いかける人」に置きかえると身近になる。熱心は普通である。不可能を可能にするには、逆境を油にするような情熱が必要である。

### 3・新聞等から

◆「先生は“教師”、生徒は“お客さん”と呼ばれるようになりました」〈朝日：折々のことば：しりあがり寿〉：今や教職はブラック職業と言われ、先生は長時間労働で疲弊し、信念より保護者からのチェックを優先されるという。部活動がお荷物になり行き場を失う。残念だ。

◆「真ん中だけが主役じゃないだぞ。一番端の人も踊らなきゃならない。5人がいて、ドリフなんだよね」〈朝日：語る：高木ブー〉：ドリフで常に隅っこの定位置にいた高木をいかりやが日劇のラインダンスを見せに連れて行った時に言った。脇役の大切さはバスケットも同じ。

◆「“何苦楚”の精神を受け継いだ。今の努力、今の苦労は何のためにあるんだ、将来の礎を築くためのものだ」〈朝日：スポーツ：中西太の思い出〉：語呂合わせのキーワードはバスケットのコーチング、人生の指針においても重要である。「楽働」は秀吉の言葉。決して人を疲労に導かず、逆に増々体力も精神力も鍛え太らせてゆくという。「馬好謙強友」もある。